ULTRAMARINE

論創社

レイモンド・カーヴァー詩集

海の向こうから

黒田絵美子 訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

海の向こうから

一九九〇年七月二〇日　初版第一刷発行©

著　者　レイモンド・カーヴァー

訳　者　黒田絵美子

発行者　森下紀夫

発行所　論創社

東京都千代田区神田神保町二・一九　細渕ビル

電話番号（〇三）二六四―五二五四・五二三二

振替口座（東京）六―一五五二六六　〒一〇一

印刷・製本　中央精版

1990 © Raymond Carver

落丁・乱丁本はお取替え致します

海の向こうから

海の向こうから　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

にせものの空　テス・ギャラガー　1

1

今朝　21
絵を描くとき必要なもの　ルノアールの手紙より　24
ある午後　26
血液の循環　28
クモの巣　32
バルサの森　34
弾丸　37
手紙　41
解剖室　44
二人が暮らした所　48
思い出　50
ぼくの車　52
ばか　56
ユニオンストリート、サンフランシスコ　夏、一九七五　59

ボナールの裸婦　64
ジーンのテレビ　66
メソポタミア　70
ジャングル　72
望み　74
ここの裏の家　78
限度　80
こわれやすい女の子　85

2

メヌエット　91
出口　92
呪文　97
東方より、光　100
オーバーな話　104
彼女の不幸の作者　106
ダイナマイト係　109

ハサミムシ　モナ・シンプソンに捧ぐ　112
ナイキル　118
可能性　120
不精者　124
メキシコシティーの火を喰う少年　126
食料品の行方　128
ぼくにできること　131
小さな部屋　134
やさしい光　136
庭　139
息子　144
カフカの時計　手紙より　148

3

電光のように過ぎてゆく過去　152
眠れぬ夜　154
デル・マイオー・ホテルのロビーにて　156

ブラジル・バイア州 159
現象 164
風 リチャード・フォードに 166
渡り鳥 169
眠り 176
川 178
一日でいちばんいい時間 180
もや リチャード・モーリスに捧ぐ 182
話し相手 187
昨日 188
学校の机 190
ナイフとフォーク 195
ペン 198
賞 202
いきさつ 204
草原 209
のらくら 212

すじ 214
待っている人 218
4
葛藤 222
川の流れ 224
九月 228
白い野原 230
ハンティング 234
窓 238
かかと 240
電話ボックス 243
キャディラックと詩 247
単純 250
ひっかき傷 252
母 254
子ども 256

畑 258
「プロヴァンスの二つの町」を読んで 262
M・F・K・フィッシャーに捧ぐ
夕方 264
残り 266
スリッパ 268
アジア 271
贈りもの テスに捧ぐ 274
訳者あとがき 黒田絵美子 280

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

にせものの空（フォルス・スカイ）

テス・ギャラガー

レイモンド・カーヴァーとわたしが、日本の小説家で、レイの短編の翻訳をしていらっしゃる村上春樹氏にお会いしたのは一九八五年の夏でした。一九八二年に別荘として建てた「スカイ・ハウス」においでいただいたのです。スカイ・ハウスは、ワシントン州のファンデフカ海峡に面したところにあります。ちょうどその当時まさにここで、レイが『海の向こうから（ウルトラマリン）』を書いていたのです。村上氏はステンドグラスのお仕事をしていらっしゃる奥様のヨーコさんと一緒においでになり、レイとわたしが二人で釣ったサーモンの燻製と紅茶をお出ししたのを覚えています。

わたしたちは、アメリカとカナダを隔てる幅二十マイルの海峡を見渡す、窓に囲まれた部屋に坐って話をしました。レイの小説が、なぜ日本でそんなに人気があるのだろうという話から、結局、日本の読者もちょうどアメリカの中流階級の人々と同じように、夢の実現に挫

折し、苦悩しているのだろうという結論に達しました。たぶん、労働者の生活には屈辱感に似たものが両国共通にあるのだろうと。レーガン時代のアメリカでは、いわゆる「アメリカン・ドリーム」を達成するためには、単にハードワークだけではむずかしくなってきているとか。あるいは、その結果として生ずるアル中などというような精神的荒廃にも話が及んだようです。よく覚えてはいませんが。

あの日の午後の名残が、レイの美しい詩〈弾丸〉になりました。この詩は偶然ということをテーマにしています。村上氏が日本の読者は、レイの作品の中に偶然という要素を見ているようだというようなことをちょっとおっしゃったのです。ある瞬間すべてがうまくいっていたかと思ったら、次の瞬間には人生がすっかり変わってしまうということがあり得ることを、日本の読者は納得しているようだと。〈弾丸〉を読むと、記憶というものの身軽さを体験できます……記憶は、あっという間にスカイ・ハウスの部屋からレイを連れ去って、猛スピードで運転する自動車の中に押しこめます。でも、過去がそっくりそのまま再現されるのではなくて、現在の間を縫うようにして過去がもどってくる気がします。

『海の向こうから（ウルトラマリン）』の詩を読んでいると、レイが「過去の稲妻のようなスピード」と呼んだ

現象を何度も体験します。過去があまりにも強烈で、現在の生活にまで押しかけてきて、時にはわたしたちの行く手に長く暗い影を落としたりすることがあります。でも、あの日の午後、わたしたちが日本からのお客さんと一緒だった時には陽が照っていて、海峡には大きなタンカーがいくつかシアトルの方角、東へとゆっくり進んでいました。潮が満ちてきて、別荘の下のほうから、波が浜辺へ打ち寄せる音が聞こえはじめました。みんなでテラスへ上がって、街の向こう側に広がるオリンピック山脈の景色をながめました。

わたしが窓ガラスの汚れたところを指さして、「あそこはよく鳥が空と間違えて突入して、敢え無い最期を遂げるところです」と村上氏に教えました。ガラスに映った空を本物の空と間違えて飛び込んでしまうのです。みんな黙りこんでしまいました。にせものの空に引き込まれて死んでしまう、そういうあっけない死に方と似たような運命が、自分の身にもふりかかるのではないかと、みんな怖れて口をつぐんでしまったような感じでした。

レイモンド・カーヴァーは、人生においても仕事においても「にせものの空」の餌食でした。同時に、彼はそういう状態にある人間の傷つきやすさを愛しく感じ、人間はガラスに思いっきり飛び込む鳥と同じような手痛い間違いを犯すものだということも知っていました。

でも、彼は過去を回想して、それに新たな道を与え、理解しようという努力もしました。この努力の結果、過去の痛みに新しい呼び名を見つけたこともありました。例えば、彼は人生の中で最も扱いにくかった二人の人物に繰り返し繰り返しアプローチをしています。その二人とは、自分を幸せにしてくれと常に息子に要求ばかりして不満のかたまりみたいだった彼の母親と、いつまでもレイを罪の意識で縛りつけておこうとした前の奥さんです。いくつかの詩の中で彼女たちとの関係を組立て直すことによってレイは、現在なお止むことのない彼女たちの不満の声を、ほんのしばらくのあいだ、鎮めることができたようでした。ただ、そういう家族の残酷さというのは、どこまでも手を伸ばしてくるものです。

ぼくが愛した人たちは、何千マイルも離れたところにいる。
でも、彼女たちは、ここにもいるんだ。バリンドゥーンのこの貸別荘の中にも。
それから、ぼくが最近寝泊まりしているホテルの部屋にもいる。　〈学校の机〉

レイは、〈望み〉の中で最初の結婚が破局を迎えたときの屈辱的な場面を描いています。

ぼくが車で去るとき、
彼女とボーイフレンドは玄関の鍵をつけかえていた。
二人は手を振った。
こっちも、二人のことを悪く思ってはいない
ということを示すために、
手を振り返した。

「スカイ・ハウス」に坐ってこれを書いていると、海や空やカモメや鷲がとても身近に感じられ、天窓から射す明かりが絶えず変化していることに、あらためて気がつきました。レイが海のことを親友と呼ぶようになったのも首肯けます。

ぼくは椅子を持ってきて、海をながめて何時間も坐っていた。
……ぼくに何が起こったか、誰も知らない。

ここ、海で。知っているのは、海、君とぼくだけだ。　〈やさしい光〉

外の世界のムードが、突然この海沿いの別荘に入りこんでくるという事実は、ちょうどレイの感情の世界と一致します。レイの心の中には、いつも、きれいに拭き消された黒板に新たに文字を書きはじめなければ、という気持ちがありました。午後には、「部屋をふたつに裂いた」光が射し、時には「海上に白いもやがかかっている」こともあります。ちょうど、遠くの海上のボートを望遠鏡で見ていた話し手が、そのボートが突然グラッと揺れて止まったのに気づき、どうしたのだろうと手が痛くなるまで望遠鏡を握りしめますが、結局そうしていてもしょうがない、望遠鏡を置いて自分の仕事にもどろうと「ドアを開けて出て行った」という、この詩の心境にもそのことはよく表れています。〈もや〉

現在にもどろうというこの姿勢は、孤独な心の中でなにが一番重要なんだろうかと模索する一連の詩に共通して現れています。〈単純〉はわたしが一番好きな詩のひとつですが、この中でもまさに、今、現在に焦点がしぼられています。つまり、キイチゴを食べることの楽しさに焦点がしぼられているのです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo